
真夜中の戦い

マシモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の戦い

【Nコード】

N9837I

【作者名】

マシモ

【あらすじ】

中学三年生の神谷大樹はいじめに悩まされていた。その日もいつもと変わらず、学校へと登校したのだが……

1・夢

真つ暗な空間の中にいる。膝を抱えてうずくまっている様だ。周りに数人、取り囲むようにいる。彼らは絶えず何かをいつている。

「…………ケ、…………口、…………ネ」

よく聞き取れない。口々に何かを叫んでいるようだ。

「…………ケ、…………口、…………ネ」

だんだんと彼らの語気が荒くなる。彼らは取り囲んでいる物に対して怒りを

ぶつけているようだ。口々に叫んでいた声が重なりだした。

「 マヌケ、ウスノ口、シネ 」

その瞬間、神谷大樹は夢から覚めた。また今日も憂鬱な一日が始まるうとしていた。

カーテンの隙間から朝の光が射し込む。神谷大樹は体を起こし、ゆつくりとベットから

起き上がった。カーテンを開けて、体全体に朝の光を浴びる。

両腕を伸ばし、軽く伸びをした。今日一日の事を考えると憂鬱になる。

本当は学校など行きたくないのだが、両親を心配させたくないのと、あいつらに

負けてたまるかという変なプライドが邪魔をしていた。

少し急な階段を下りていく。いつも通り洗面所に行き、顔を洗った。タオルで顔を拭き、目の前の鏡を覗き込む。……顔を殴らない。それがあいつらの

ルールだった。その為、今の所、親や先生にいじめが発覚する恐れはなかった。

最近になって奴等の言動と行動はエスカレートするばかりであった。このままだといつか自分の身に大変な事が起こるのではないかという不安が日増しに強くなっている。

大樹が思案していると、いつの間にか訝しげな顔をした妹の歩美が隣に立っていた。

大樹が顔を向けると、早くどいてよ、という顔で睨み付けてきた。

「……悪い。今どくよ」そう言うと大樹は、持っていたタオルを元の位置に戻し、食卓へと足早に駆けていった。

食卓にはすでに父親が新聞を広げて座っていた。いつもの光景だった。

父親とはここ二年ぐらいたまもな会話をした記憶がなかった。父親は常に仕事に

追われている様だった。夜の帰宅は0時を過ぎることが多く、休みの日の日曜日

などは、よく接待ゴルフなどで家に居ないことが多かった。

そんな父親に今置かれている状況を話す気にはなれなかった。

朝食を手早く片付ける。テーブルの上に置いてある弁当箱を手に持ち、二階の自分

の部屋へと駆け上がる。カバンに弁当箱を入れる。

学生服へと着替え、冬のコートをはおった。

机の上に置いてある鏡を見ながら、髪の毛を軽くセツトする。

心の中で「よし」と気合を入れる。カバンを持ち、また一階へと降りていく。

「行ってきま・す」と食卓の方に一声かけて通り過ぎる。

「いつてらっしゃ・い」と後ろの方で母親の声が聞こえた。

4・登校 - 1

玄関のドアを開けて外に出る。外は肌寒かった。気温は5 か6
ぐらいだろうか。

口から漏れる息が白い。

ガレージの方へと歩いていく。そこには中一の時に買ってもらった、
3段変則機付の
自転車置いてあった。

大樹はハンドルを握ると、愛車のサドルに跨りペダルを漕いだ。

ギアの設定は一番軽いローに設定されていた。

その為、最初の漕ぎ出しにはそれほど力を必要としなかった。大樹
は買った当初は、

わざと一番重いギアにして、最初の出だしを楽しんでいた頃もあつ
たが、今では

そついう事を一切せず、必ずローに設定していた。

少し漕いだから、ギアをローからミドルへとスイッチする。若干重
く感じたが、少し

立つと何も感じなくなった。急ぎの時以外は一番重いギアを使うこ
とはなく、ミドルの

場合が非常に多かった。

向かい風が頬にあたり冷たい。気温が高い夏にはこの風が爽快に感
じたりするが、

冬のこの時期にはただのいじめにしか思えなかった。

住宅路を抜けて『青葉町6丁目』の信号を右へと曲がる。

大通りへと出ると急に歩道を歩く人が増える。

出勤ラッシュであった。大樹はなるべく車道に近い左側を走る。

何人もの人の横を通り過ぎていく。
まだここから学校までは十五分ぐらいはかかるだろうか……。

大樹は物思いにふける。目下の所、大樹を悩ませていたのは去年の秋ぐらいから

始まった学校でのいじめであった。始まりの原因は今でもよくわからない。

突然、放課後呼び出されて、パシリみたいなことをやらされたのが始まりだった。

一番最悪だったのが万引きをやらされたことだった。

かなり強情に断ったが、彼らの機嫌をそこねるだけで何も意味がなかった。

結局は彼らに逆らえず万引きしてしまった事を大樹は今でも後悔していた。

その時の事を思い出す度に、大樹は罪悪感に悩まされ続けていた……。

5・登校 - 2

古びたオフィスビルを通り過ぎる。学校帰りによく立ち寄るコンビニエンスストアが見えてきた。

その先の『青葉町9丁目』の信号で、進路方向を東から北へと変える。

ここまで来ると同じ学生服を着た男子学生やセーラー服を着た女子学生がちらほら見える。

大樹の前で信号待ちをしている女子学生たちが、昨日見たテレビの話題で盛り上がっていた。

ポニーテールの子がおさげの子に話しかけた。

「昨日の逃亡者見た？」

「うん。見た見た」

そういえば昨日午後7時から8チャンネルで、2時間番組をやっていたのを

思い出した。

様々な分野のタレントの人が都会のある区域の中を、2時間捕まらずに逃げ切ると賞金がもらえるという番組だった。

タレントの人は脱獄者役で警察役の人に捕まると牢屋に入れられるという設定であつた。

大樹は受験勉強があつたため、残り30分だけ見た。

「最後、……結局みんな捕まっちゃったよね」

「うん。最後残り二分だったのに。惜しかったよね」

「それにしても、赤星君かっこよかった。汗流して走ってる姿かっこよすぎるー！」

「うん。素敵だった。もう少しで逃げ切れたのに……残念」

そう言うとおさげの子は地団駄を踏んだ。赤星というのはヴォイスという歌って踊れ

る5人組のアイドルグループの一人でみんなが二枚目であった。その中でも赤星は一番人気があった。

その時、信号が青に変わった。前にいた女子学生が歩き出す。

大樹も足に力を込め、ペダルを漕ぐ。

横断歩道を渡るとイチヨウの木が立ち並ぶ街路樹へと入る。

歩道は通学途中の生徒で溢れている為、今度は車道の方を走る。左にはイチヨウの木が整然と並んでいる。

先月ぐらいから、葉が黄色く色好き、鮮やかな黄金色を醸しだしていた。

大樹が通う南海中学校の校舎が見えてきた。向こうから同じように自転車に乗って

登校してくる生徒が見える。両手を学制服のポケットに突っ込み、アイポットを

聞きながら通学して来る生徒もいる。大樹は通学途中の生徒を、横目に見ながら

校舎の正門をくぐった。

6・学校 - 1

自転車置き場に自転車を置き、カギをかける。

カゴからカバンを取り出し、校舎へと歩いていく。

自転車に乗っている内はまだいいのだが、今正に校舎へと向かっているこの瞬間が

とてつもなく嫌であった。これからの事を考えると、回れ右をして今来た道を引き

返したい衝動に駆られる。

だが自分にそんな事をする勇気がない事を大樹は知っていた。

下駄箱で履いている靴を脱ぎ、上履きに履き替える。階段を上がり、三年二組の

教室を目指す。途中知らない下級生の生徒とすれ違う。階段を上がる足が重い。

あいつ等は今日も来ているのか？

同じクラスの中山が大樹の横を通り過ぎて教室に入っていく。

クラスの他の人達は大樹に対して関心を示す事はなかった。

下手に関わって巻き込まれるのが嫌なのである。大樹はそう思っていた。

大樹はクラスの中では完全に孤立した存在であった。小学生から一緒だった中山も

今では知らぬ存ぜぬの顔をしていた。

大樹は教室に入った。まずは教室中を見渡す。天田はまだ来ていない様だった。

その次に三田村、斉藤、下山を確認する。

三田村は机の上に腰掛、隣の席の日高亜希子とにやにやしながら談笑していた。

斉藤と下山は椅子に座り、向かい合わせになる格好で何かしきりに話し合っていた。

予鈴が鳴り、少ししたら担任の前田先生が教室へと入ってきた。

朝のホームルームが始まった。まずは出席の確認を取る。それが済むと受験の

心得に付いて永遠と語った後、ホームルームは終了した。

1 時限目、2 時限目と何事もなく過ぎ去った。大樹は窓の外に目を向ける。

2 時限目、体育の授業だった生徒達がまだ校庭にいて元気に走り回っていた。

大樹は机に肘をつき、頬づえする格好でそれを見ていた。天田はまだ来ない。

今の所は大樹にとって安らかな時間が流れていた。

天田は月に一、二回のペースで学校を休んでいた。天田が休みの時は、三田村達が

大樹にちよっかいを出すことはほとんどなかった。

このまま、天田が来ないことを祈る。

3 時限目、4 時限目が終わりお昼になった。天田はやはり現れなかった。

ここまでくると、今日は無事家に帰れそうだ。大樹は安堵した。

カバンから弁当箱を取り出し机の上に置く。弁当箱を包んでいる布をほどこき、

弁当のフタをあける。

今日のおかずは、豚肉の生姜焼き、里芋の煮ところがし、玉子焼きであった。

色取りでブロッコリーの和え物が添えてあった。

母親の作る豚肉の生姜焼きは格別で大樹の好物でもあった。

大樹は、朝は時間がない為手早く食べてしまおうが、逆にお昼の時は時間をかけて食すことにしていた。

特に昼休みは時間が長いうえにすることがなかったからだ。

クラスの半数以上は、教室を出て外へと食べに行く。

屋上、校庭、おのおの食べる場所が決まっている様だった。大樹は教室を見渡した。

大半は女子しか残っていなかった。

朝、三田村と話をしていた日高亜希子の姿は見当たらなかった。

大樹の位置から斜め前に井上、木下、橋本の女子グループが机を並べて食べていた。

井上がひそひそと声をひそめてしゃべっていた為、何の話しをしているのかわからなかった。

このグループは日向というよりも日陰の部類に入る女子たちで構成されていた。

井上も木下も目立たないタイプの人間で、橋本に至っては一人だと何もできない

のではないかと思うほど気の弱い子で、自ら進んで何か行動起こすタイプとは

正反対に位置する子であった。

その似たもの同士の三人が集まってできたグループがおたくグループであった。

クラスのみんなからはそう呼ばれていた。根暗でクラスからも浮いた存在でも

ある三人だが、大樹よりかは、はるかにましであった。

彼女たちにはまだ友達と呼ばれる存在がいるからだ……。

大樹は一人で昼食をきれいにたいらげた。

7・学校 - 2

5時限目になると、教室にある異変が起こった。

三田村、斉藤、下山と女子の日高亜希子の姿が見えなかった。

大樹は妙な胸騒ぎがした。これは何かが起こる前触れなのではないだろうか……。

今では大樹の思考回路は嫌な方、嫌な方へと考えてしまう様にできていた。

天田がいない。三田村がいない。斉藤がいない。下山がいない。

そして……日高亜希子がいない。いない人たちで何か企んでいるのではないか。

大樹の思考は下へ下へと降りていった。

先生の話しによると、4人とも体調不良とのことだった。

『そんなわけあるか!……絶対違う』大樹は心の中でそう叫んだ。

5時限目から大樹の胸中は穏やかではなかった。正直、彼らのことが気になって

しかたがなく、授業が手につかなくなった。

だが何事もなく6時限目が終了し、本日の大樹の学校での業務は終了した。

大樹はカバンを持ち、教室を出た。

下駄箱で靴に履き替える。前に一度靴がなくなるという事件があったが、それは

天田たちの仕業であった。その時はしかたなく、上履きのまま、家に帰った。

後日、ボロボロの状態の下駄箱の中に押し込まれていたのを発見したときは、

とても悲しい気持ちになった。

いじめがバレルのを恐れた大樹は、その靴を隣町の公園まで捨てに行つたときの
ことを思い出した。

今日は大丈夫だ、無事に家まで帰れるんだ、そう心の中でつぶやくと沈みかけていた気持ちが幾分慰められた。

大樹は自転車置き場まで歩いていき、自転車のカギをはずそうと腰を下ろす。

その時だった。

「神谷君！」突然、自分の名前を呼ばれたので大樹は驚いた。恐る恐る振り返るとそこには中山が立っていた。

「ごめん。びっくりさせて」そう言うと、中山は両手を合わせて「めんのポーズをした。

呆けた顔をしている大樹に向かって中山は歩いてきた。中山とこつやって面と

向かつて話しをするのは久しぶりの事だった。

「何か用なの？」大樹は憮然とした表情で聞いた。

何か面倒な事に巻き込まれるのではないかと内心思った。

「久しぶりだね。こつやって話すのも。あのさ、最近天田君たちの暴力ひどい

よね。体、大丈夫？」

どうやら大樹の体の事を心配して聞いてきたらしい。

大樹は幾分警戒をといた。

「大丈夫なんかじゃないよ。昨日だって放課後死ぬほど殴られたし」

「え、そうなんだ。昨日何か天田君機嫌が悪そうに見えたけど、何かあったのかな？」

「わからない」大樹にも理由がわからなかったが、確かに昨日天田は機嫌が悪かった。

「今日さ、三田村君たちお昼で帰っちゃったけど、それも変だよ。先生は

体調不良って言ってたけど、朝から特に調子悪そうには見えなかったし……」

「絶対、体調不良じゃないよ。4人とも体調不良ってどう考えてもおかしいだろ」

「うん。そうだよ。絶対おかしいよね」

そう話し終わると少し間が空いた。二人の間にぎくしゃくとした間が流れた。

中山はそれでも意に介さず話しかけてきた。

「日高さんも天田組に入っているのかな？」天田たちのことはクラスでは『天田組』と呼ばれていた。

「わからない。でも今まで天田たちと一緒にいる所は見たことないな」

大樹は首を少し傾げて答えた。

「でも、一緒の時間にいなくなっただし、もしかしたら今も一緒にいるんじゃないかな」

「……うん。そうかも知れない」

大樹は少し思案してからそう答えた。

美貌の持ち主の日高亜希子は、クラスの男子の中だけではなく、他の学年の人から

も人気があり、今までかなりの数の男子が彼女に告白しては振られていったと聞く。

顔は細面で、目鼻立ちがはっきりしており、少し大人びた顔をして

いた。

髪はストレートで、肩下のあたりまで伸ばしたきれいな黒髪は清純さと清潔感を醸し出していった。

正直そのへんの売れていないアイドルなんかよりも、遙かにかわいかった。

その彼女がどうして天田組なんだろう？

クラスの清純派アイドルの日高亜希子とクラスの中で忌み嫌われていた天田組……。

どう考えても結び付きそうにないが……。

いくら考えても答えは出なかった。

それよりも中山のことだ。大樹はやっと理解した。

普段話しかけて来ない中山がどうして話しかけてきたのかを……。

最初中山のことを大樹は、自分の体の事を心配して話しかけてきたのかと思ったが、

実際のところは、日高亜希子の事が聞きたかっただけなのかも知れない。

中山も、日高亜希子が好きな男子の内の一人なのだろう……。

そう解釈した大樹は、「俺、急いでいるから行くよ」と言い残し、まだしゃべり

足りなさそうな中山を尻目に見ながら、その場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9837i/>

真夜中の戦い

2010年12月18日14時29分発行